

# 尾瀬ネットワーク通信

2005年8月20日 VOL8. 3(24) NPO 尾瀬自然保護ネットワーク

## キャンプ場の全面廃止を 「尾瀬を守る会」が申し入れ

尾瀬自然保護ネットワークなど自然保護民間6団体で構成する「尾瀬を守る会」(中根一郎会長)は8月1日、東京・中央区新川の馬事畜産会館での会議で、環境省が11月に尾瀬ヶ原・尾瀬沼をラムサール条約湿地に登録申請することと、尾瀬沼野営場(キャンプ場)を復活させる計画について討議した。その結果、ラムサール条約登録申請のうえからもキャンプ場の存在は問題で、全野営場を廃止するよう申し入れた。

環境省は尾瀬ヶ原・尾瀬沼は、わが国を代表する高層湿原であり、保全の担保措置としては日光国立公園特別保護地区に指定されていることから、すでにラムサール条約湿地登録の要件を満たしているとしている。

一方、ラムサール湿地の要件は  
国際的に重要な湿地である  
国立公園特別地域等の地域指定により、将来にわたり自然環境の保全が図られている  
地元自治体等から登録への賛意が得られている...の3点。

このうち尾瀬を守る会が問題にしているのは「将来にわたり自然環境の保全が図られている」という要件。この条約の目的は、水鳥の生息地等として国際的に重要な湿地とそこに生息する動植物の保全を促進することにある。ところが尾瀬の現状をみると、湿原の乾燥化が年を追って進み、自然環境の保全が将来にわたって図られているとは言いがたい状況にある。

その原因の大半は人為的な環境破壊にあり、なかでも尾瀬沼の開発、取水問題が大きい。本

来、福島県側(沼尻川)に流れていた沼の水は、水門を設けて群馬県側(片品川)に放流して発電に用いられていることにより、沼尻川の水流は衰えている。そのうえ、山小屋の風呂や水洗トイレに利用されることにより、湿原へ流入する水量はほとんど失われてしまっている。

こうしたなか、環境省北関東自然保護事務所(日光事務所)は7月13日、休止中の尾瀬沼野営場の再開へ向けて整備工事を開始したいと尾瀬を守る会に通知してきた。

守る会の会議では、ラムサール条約の目的からして

環境汚染につながるキャンプ場の運営には問題があり、尾瀬沼キャンプ場の整備計画を破棄するとともに、現在利用可能な山ノ鼻、尾瀬ヶ原(十字路)の両キャンプ場も撤去する湿原保全のため沼尻川の水利用を制限する...等を骨子とした申し入れ書をまとめ、日光事務所に提出した。

なお、尾瀬を守る会の構成団体は次の通り。  
(五十音順)

- ・ 奥利根自然センター
- ・ 尾瀬自然保護ネットワーク
- ・ 尾瀬自然保護指導員福島県連絡協議会
- ・ 群馬県自然保護団体連絡協議会
- ・ 福島県自然保護協会
- ・ 山林保護全国ネットワーク

(高橋 喬)

## 尾瀬ヶ原クリーン作戦を実施...群馬側...

今年度第1回尾瀬ヶ原入山指導は、その1週間前の6月18日に福島側で行なったクリーン作戦に連動して、6月26日(土)に、ゴミ持ち帰りの呼びかけとごみ拾いをメインにした活動を実施した。参加者は池田稔夫、佐藤信良、横田有弘、坂本敏子、長島睦世、深山美子、清水博之の7名。

ルートは山ノ鼻～牛首～ヨッピー橋～東電小屋～見晴の木道沿いで、山ノ鼻を朝9時に出発し見晴へは午後2時に到着した。拾ったゴミの内容を分析した結果は次の通り。近年、ハイカーのマナー向上からゴミなどを安易に捨てる行為は非常に少なくなり、自然保護に対する認識は深まっている。しかしながら全く無くなった訳ではない。拾ったゴミの内容を分析した結果は次の通り。

重量は群馬分析センターの協力によるもの(乾物)

分類	点数(件)	%	重量(g)	%
すいから	4	3.0	1.13	0.8
紙・ひも	26	19.8	14.70	10.7
キャンディ等包装	44	33.7	7.00	5.1
プラスチック (ビニール等)	25	19.1	41.00	29.9
たべもの残り	8	6.1	7.03	5.1
ゴム類(輪ゴム等)	16	12.2	19.70	14.4
分類困難	8	6.1	46.57	34.0
合計	131	100	137.13	100

ゴミはキャンディ、弁当などの包装紙類、ビニール袋の一部がほとんどで比較的小さいものである。

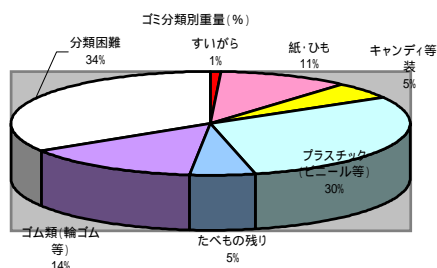
缶やペットボトル類は全く無かった。

落ちていた場所は木道沿いよりも小屋周辺、休憩所に多かった。

異質なものは池塘の中にボールペン(かなり古い)があった。

類困難物は、黒くなった固形物で時間の経過した食べ物の残りと思われる。

食べ物の残りはミカンの皮など。



(群馬側担当理事 清水 博之)

## 尾瀬ヶ原シカ調査...75頭を確認

山ノ鼻から竜宮までの4.13kmの間で、75頭を確認.....これは6月24日夜半に行われた今年度第1回尾瀬ヶ原シカ調査の結果です。

参加者は池田稔夫、佐藤信良、横田有弘、長島睦世、深山美子、坂本敏子の6名。

好天とはいえ時折ガスが広がる中、シカはほとんどの地点で森林から出て採食などの活動中で、ビームライトの強い光に驚いて左右に走る姿を肉眼でもはっきり見ることができました。確認はほぼ南縁で、北西側は、猫又川掘水林でわずか3頭のみでした。



尾瀬ヶ原の夜間シカ調査風景

翌25日の日中に原を歩いて、木道沿いにシカの掘り起こし跡を、多数発見しました。

それらは主に見晴から三叉路に向かう木道の両端で、茶色の土くれが無残に露出した掘り起こし跡が10ヶ所近く続いていました。メンバー達は思わず息をのみ、それをただ見詰めるばかり...

次回の調査は9月3日です。参加をお待ちしています。

(シカ調査担当理事 坂本 敏子)

## 指導員養成講座終了者

## 現地入山指導・会津バス添乗解説初体験記

### 熊に遭遇！貴重な体験をした初入山指導

平成16年修了 池田 稔夫

6月24日(金)夜、初めてシカの夜間調査に参加。翌日、山ノ鼻及び尾瀬ヶ原で入山指導、クリーン作戦を実施し三叉路(見晴から東電小屋、温泉小屋分岐)で休憩中、突然佐藤信良さんが「熊だあ」と声を上げました。下田代辺りから東電小屋方向へ走っている黒い大きな熊を他の5人の仲間も見つけていました。

すぐにデジカメで3枚撮りましたが、2枚に何

とか熊が写っていました。距離はわかりませんが約1000m位？。野生の熊を見たのも初めて、カメラで撮ったのも初めてで、貴重な経験をさせて頂きました。日時は6月25日午後12時41分でした。

今回初めての現地活動で、深夜のシカ調査やリーフレット配り、ゴミ拾いを体験し尾瀬の花々を楽しみ、遠くからでしたが野生の熊を見ることが出来、尾瀬の自然を実感しました。

### 初めての会津バス添乗解説

平成16年修了 初谷 博  
本番前夜(7月15日 夜9時頃)

なんとなく、そわそわ。このままではベットに入れない状態。なぜか。そうか、バス添乗で何を話そうか。去年、磯部さんは何を言っていたっけ。あーあ・・・思い出せない。

いつも、仕事でやるような、アドリブでやるにも、いいかげんな事は言えないよ。それでは、とばかりに「尾瀬ガイドブック」を取り出して、「あんちょこ」を作成。これでよし。ひとりで納得。

一回、声を出して練習してみるが、なんとも様にならない。観客が居たほうが良いかな。家族を呼んでやってみるか、思案。そのうち、睡眠、ようやくベッド。S z z z z。

本番前夜(7月16日 午後2時頃)

ガタン、ゴトーン。東武線車中でメモを何度か確認。声を出しても回りに聞こえない。会津高原駅で下車。須賀川から車で来てくれた磯部さんと合流。やれやれ。夕食までには、桧枝岐「ひのき屋」に到着できそう。

「こんにちは」ご主人、奥さんが出迎え。佐藤さん、椎名さん、大橋さんご夫妻がすでに到着。  
本番1日目(7月17日 朝6時)

大橋さんの車で御池駐車場に到着。駐車場の半分くらいが埋まっている。定位置に机、いすを置いて看板立てて、準備完了。バスに乗る人の列が出来始めた。

1回目、磯部さんの後ろについて同乗。さすがにうまいなあ。しばし聞きほれる。そうだ、ブナ平の見晴らしを解説に入れよう。(ちゃっかりパクリ。)

2回目、一人でやってみよう。さっそく、ブナ平でスピードダウン、乗客いっせいに車窓に釘付け。ひとまず成功。後ろ向きでカーブを曲が

ると結構きついなあ。オットット。

3回目、最前列のカップルがこの私めをデジカメで撮っている。少しいい気分。沼山峠下車の際、乗客の何人かが感謝のお礼。気分をよくして後何回。そろそろ、登る乗客の数も減ってきた。そうだ、みんなでニッコウキスゲを見に行こう。ついでに、福島の団体さんのガイドを手分けしてやりましょう。大江湿原に到着。例年に無く、オレンジの海。一同感動。ワタスゲ、ハクサンチドリ、ヒオウギアヤメ、アサヒラン。しばし観察。

尾瀬沼ヒュッテで「ひのき屋特製弁当」+須賀川特産きゅうりの一本漬け。これはたまらん。夕立が来る前に帰ろう。さーて。混む前に「燧の湯」にジャボン。気持ちがいいなあ。

宿に戻ると佐藤さんが宿の家族と歓談中。仲間に入れて頂くが、佐藤さんは麦茶、私は良く冷えたビール。湯上りはこれに限る。ゴクリ。

本番2日目(7月18日 朝6時)

今日も、昨日と同じく、御池駐車場は混雑。天気は快晴、何となくワクワク。

さあ、添乗だ。昨日、大江湿原で見てきたばかり。早く話してあげたい。話の組み立てはどうしよう。少しもったいつけてみるか。

1回目、前日同様、ブナ平で乗客感激。昨日より口の回りがいい。

2回目、3回目、何だか調子が出てきたぞ。そろそろオシマイ。

・乗客の感想その1；こんなの初めて。とっても得した気分。

・乗客の感想その2；解説中にあった「アヤメ平」を壊したのは私です。と懺悔する人。

・乗客の感想その3；いつも通るバス道が退屈しなくて楽しかった。

・乗客の感想その4：ブナ平を初めて見ました。これから秋が楽しみです。

・乗客の感想その5：年配で山のベテラン。“いい地図ですね”としきりに誉めていた。

・私の感想：乗客に喜んでいただき、こちらも感謝しました。まだまだ知識、経験が少なく、メンバーの皆様のご指導を頂きながら、楽しくお手伝いをさせていただきます。

磯部さん、佐藤さん、椎名さん、大橋さんご夫妻、ありがとうございました。

## 活動参加紀行（福島側）

平成14年修了 横田有弘

6月18日（土）

昨日の夕立で山肌の緑がひときわ瑞々しく、朝の空気は清々しい。山は何と言っても晴がいい。昨秋以来の御池である。梅雨の晴れ間に誘われたかのようにハイカーの姿が多いようだ。既に1台のバスが大勢のハイカーを乗せて沼山峠に向けて出発していった。

早速、我が尾瀬ネットワーク作成のリーフレットなどを、バスに乗り込むハイカーに手渡す。ほぼ満員になった頃運転手さんが乗車。添乗解説のため島上氏も乗車した。私も見習い乗車させてもらう。

観光バスであればさしずめバスガイドさんの名調子が聞こえそう。まず山側（進行方向右側）にムラサキヤシオツツジ数本鮮やかな色で咲き、しばらく先の谷側はるか下方には一面のブナの緑、地図上では「ブナ平」と記されている。幾曲りかすると谷側に小さな池が見える。進むにつれてバスの後方に会津駒ヶ岳の一部に残雪が見え、さらに進むと谷側に深く長池の湿原にミズバショウが一面に白く見え、さらに幾曲りかすると残雪のまだらな燧ヶ岳が大きい。脇目もふらず山を稼いでいた私。樹木や草花に疎く、風景の描写が下手なのが残念である。

沼山峠バス停の小広い広場からハイカーが続々と沼山峠の登山口に吸いこまれて行く。御池に戻るバスから、すれ違うバスの中に乗客に向かって立って添乗解説している磯部氏の後姿が見えた。

佐藤信良氏が添乗解説で乗車するバスに私も見習い乗車させてもらった。今日2度目である。3度目は今回活動の目玉であるクリーン作戦（ゴミ拾い等）のため、沼山峠から大江川湿原を経て尾瀬沼畔まで行くとのこと。ゴミ拾いなら私の一番得意とするところだ。ザックを持って佐藤氏、島上氏と一緒にバスに乗る。バスの中では佐藤氏の自然解説の声が響いていた。

沼山峠バス停で磯部氏と合流。天気は上々、ゴミ挟みとゴミ袋を手でクリーン作戦の開始である。ハイカーに混じって短靴とハイヒールの中年男性2人と熟年女性がバスから降りてきた。二言三言わが先輩指導員と言葉を交わしたあと休憩所に入って行った。我々一行は沼山峠から尾瀬沼

畔への道に歩を進めた。この道は3年前、当ネットワークの指導員養成講座受講の折、沼畔から登ってきたとき以来だ。沼山峠展望台までしばらくの登り。日陰には残雪があった。うしろから先刻の短靴の3人連れが各々長靴をはいて元気に我々を追い越していった。さすがにゴミは少ない。「長い間の地道な運動の成果」と感嘆。

木道脇の淡いピンクの小さな花はツツジ科低木のイワナシと磯部氏に教えてもらった。

樹林が開け大江川湿原に出た。先ず眼についたのは木道に近い両側の湿原に、数箇所大きく黒々と土が露出していた事だった。シカの「ヌタ場」とのこと。無残な湿原が痛ましい限りだ。歩を進めると緑の湿原に今が盛りと咲くミズバショウの白が点々と続き、ハイカーが列をなして木道上看える。どこかで見た写真か絵そのものだ。

ニッコウキスゲの蕾、タテヤマリンドウの花など次々に教えてもらう。薄黄色の黒っぽい穂があの純白のワタスゲの花だと知り植物の不思議さに感動、まるで私1人のための研修会だ。

磯部氏と佐藤氏がビジターセンターへ「至仏山東面登山道調査報告書」を届けられた。

尾瀬沼ヒュッテの前で「ひのき屋」さんの豪華な弁当に舌づつみ。小屋前の大望遠鏡で燧ヶ岳山頂の登山者が手に取るように見えた。

6月19日（日）

今日も御池は好天。日曜日のためか昨日同様ハイカー多し。家族連れも目立つ。時期的にも一番混む時であろう。

何時ものようにバスに乗るハイカーにネットワークのリーフレットなどを手渡していると、私の添乗解説中の写真を撮ってくれるとのこと。できれば添乗解説は避けて通りたいと思っていた。だが、駆け出しながら私も一応ネットワークの指導員。そんなことは言ってもらえない。昨年のも武氏、磯部氏。そして今年の島上氏、佐藤氏ら諸先輩の熱意のこもった自然解説のようには出来そうもないが、活動計画の一つで私も実践しているアイドリングストップの協力をお願いすることとした。

地球温暖化に伴う異常気象による昨年の連続豪雨及び大型台風の被害の一例、ある雑誌に掲載されていた地球温暖化による100年後の憂慮される事態の一例などを挙げ、水や電気の節約やアイドリングストップを一人ひとりが実践する

ことにより、尾瀬の自然を守ることに繋がるといふ趣旨でバスの乗客に協力をお願いし、さらにリーフレットにもあるが形成されるまで6000年もかかる湿原に踏み込まない、ゴミは必ず持ち帰ることもお願いし、初めての添乗解説を終了した。

バス停で運転手さんから「地球温暖化の話ばかりで、折角燧ヶ岳が目前に見えたのだから、そのことを話してほしかった」と要望された。

私としても先輩方からアドバイスを受けていたブナ平のことを少々入れたのみで、およそ自然解説とは言い難かったかしらと反省。

もし次の機会があれば指導員養成講座で学んだことや先輩諸氏の自然解説等を基にして、より良い自然解説が出来るよう努力したいと思っている。

### 「尾瀬と奥鬼怒」に学ぶ

武 繁春

今年(2005年)は、武田久吉博士が初めて尾瀬を訪ねて、ちょうど100年目に当たる。「尾瀬! その名は山岳地の自然美愛好者に、力強い響きを与えるものではないであろうか? あの美しい森林、それに囲まれた尾瀬沼、そしてそれに望む燧ヶ岳。また萬花の咲き出でる尾瀬平の類まれな湿原と怪峯至佛。只見の峡谷と、それにたぎり落ちる三条の大瀑布。更にその美と麗と壮に於いて、邦内何ものの追隨をも許さない平滑の奔湍。」の序言で始まる名著「尾瀬と鬼怒沼」が梓書房から発行されたのは昭和5年(1930年)。

武田博士は、明治38年(1905年)「初めて尾瀬を訪う」。御年22歳。「七月六日。結束して早朝湯本を出発した。植物採集に必要な大きな荷物は勝とモ一人の人夫に負わせ、金精峠を越えて上州に足を踏み入れた。」戸倉で道案内の「土人」を雇う。鳩待峠、尾瀬ヶ原、尾瀬沼と、「消えがちな踏み跡を辿り」、「かなりの困難を経験」しながらも、「ハッチョウトンボやイトトンボの珍種を採取」しながら「尾瀬平」を探勝。「何という変化に富む植物景! そしてまた何という美しい風景 単に「珍品」を蔵するに止まらないこの豊庫 私は唯々驚嘆してしまった。」

それから19年経った大正13年(1924年)7月、2度目の尾瀬行きがかなう。「尾瀬沼再訪の希望は、最初の尾瀬旅行から帰って直に兆して居たのであった。あの明媚な風光、あの植物の美観

を見ては、そして殊に最初の旅行が余り早急に行われて、僅かに九牛の一毛を窺うに過ぎなかった観があったので、心行くまで尾瀬の地に彷徨して見たい考を抱かざるを得なかった。」その間でも尾瀬の変化は著しい。大正11年(1922年)には関東水電による尾瀬ヶ原発電計画が明らかになる。「尾瀬を盛んに人の訪う様になったのは、長蔵小屋が湖の東岸に移ってからであろう。(中略)そして今では尾瀬を訪ねる人が毎年数百人に上るといふ盛況である。」

同行者は、北大植物園の館脇氏と日本山岳会員の山口氏の2名。東京を朝発ち、沼田から追貝までは自動車と馬車を乗り継ぐ。須賀川に宿をとり、戸倉、大清水へ。「やがて三平峠の急坂にかかる。この坂の急峻なることは、古い記憶にも深く印象されているので、疲れた足を引き上げるのは容易であるまいと考えたが、尾瀬沼山人がいつか改修した由なので、意外にも楽であったのは有り難い。」長蔵小屋をベースに、沼尻から小沼方面を探検。燧登山では雷雲に襲われ「間断なき雷鳴」に肝をつぶす。

檜枝岐村にも足を延ばす。丸屋に泊まり、駒ヶ岳へ日帰り登山。「河鹿の涼しい鳴声に夢を破られて、午前4時に床を離れる。(中略)駒の登山は、半日を以て足りるとは予め聞くところではあったが、弁当の用意怠りなく、その他に村中を漁ってくさぐさの甘味を集めて携帯に及ぶ。」駒の頂上で「残雪に輝く利根奥から越後三山に連なる大連嶺(だいにんしょう)にまず讚嘆の声を惜しまなかった。」旧路を走り下って、丸屋に戻ったのは三時に近い頃であった。養蚕の忙しい中で、特に親切にもあつらえてくれた名物の蕎麦に舌鼓打ち、終日の疲労をいやしてから、涼風の立つ夕暮に宿を発して、月明かりを便りに尾瀬に帰り着いたのは、夜も9時半をやや過ぎていた。」同行の館脇氏はこの時のことを、同著に収録の紀行文の中で、「満月に近い月の光を浴びながら、密林を穿つ一すじ道を尾瀬に辿った時の心持ちは、地上のあらゆる幸福を感謝するの外はなかった。そして遂に峠を越して、狭霧こめた尾瀬沼を望んだ時の光景は詩の国に旅するとしか考えられなかった。」と述懐する。

3人は、三条瀑に、尾瀬ヶ原、至佛に遊ぶ。「第11日。尾瀬に来てから、もう一週間余の日は経過した。そして私達は無限の自然の一部を心行く

まで味わった。それでも、実のところ尾瀬の概念を得たのに過ぎないのである。時日が許すならば、私達はもっともっと深く尾瀬を玩味したいのであるが、今日はもう惜しくも袂を別たねばならない。」三人は鬼怒沼に向かう。「山人は林のはづれまで送って来てくれる。さらば尾瀬よ。さらば山人よ。」「再遊の尾瀬は、私の期待を裏切らなかった。沼も、山も、原も、溪流も、昔ながらの姿で私を迎えて呉れた。もしそれ20年間の変遷を認めたとしたら、それは道路の良くなったこと、宿泊が便利になったこと、湖上に船を浮かべて自由に舟遊しうること等である。」

鬼怒沼からは、川俣温泉に、そして湯本に。中善寺周辺ではその俗化を嘆く。「思い出すだに楽しかった2週間であった。そして尾瀬はよい所である。あの珍種に富む尾瀬平。稀に見る景色。学術上無限の豊庫というべき湿原。あれを如何に利欲に目がくらんだとは言え、貯水池にしようという計画が、同胞によって試みられ、官権によって許可されたことは、痛恨の極みである。否寧ろ国辱である。嗚呼日本の国土は遂に日本人の手によって亡ぼされる運命から、免れることは出来ないものであろうか。」と、「尾瀬をめぐる」の旅を締めくくる。

日光国立公園の指定(昭和9年、1934年)に先立つ昭和2年(1927年)6月、3回目は「春の尾瀬」。同行は風景学の田村剛博士、前日も同行の山口氏、そして営林局員の3名。田村博士の怪我、途中下山というアクシデント付き。至仏の頂上で、「いくら見ても飽かぬ眺めに、腰は中々上がりそうにもない。東西南北いずれを見ても、吾々を満足せしめる景が、遠くにも、近くにも、この空間に充満して居る。(中略)至仏の頂にはミヤマネズの外にまたミヤマハイビヤクシンが多い。土地の植木採りはその姿のよいものを掘りに来ると見えて、野営の跡もあるし、また不思議と山頂付近だけは踏跡が明瞭について居る。」

景鶴で、「瀑ノ澤と景鶴澤との間に斗出する尾根まで達した頃、天候は再び回復の徴を示した。そうなる例によって気がゆるんで来るから、木陰に休んで残雪に夏蜜柑と砂糖を入れて最後の享楽を試みた。」他の探勝時では桃やパイナップル

の缶詰を賞味している。

「この尾根には残雪の諸所に、暗紅色の斑点を認めた。帰途にはその雪を採集し、東京まで携え帰って検鏡した結果、推測に違わず、下等の単細胞藻に因る「紅雪」であることが確かめられた。紅雪は欧州アルプスや極地に知られる現象で、本邦でも今までに伊吹山だの日本アルプスに起こったことがあるが、そうザラに見られるものではない。檜枝岐の老人中紅い雪の降った話をする者があるというから、同地にも亦絶無という訳ではないらしい。」

帰路。「私は高崎から前橋に回り、県庁に学務部長や林務課長を訪い、尾瀬の真価について語り、その保護に関する愚見を開陳するの機会を得たことを喜ぶ。尾瀬は当局の努力によって、原始のままの景観を永えに止め、その価値を年と共に発揮するであろう。こいねがわくは我が熱愛する尾瀬に、限りなき幸あれ！」三平道路計画の廃止を確認するかのごとく、昭和47年(1972年)永眠

(注) 原文を新字新仮名に置き換えた参考

武田久吉著「尾瀬と鬼怒沼」昭和5年刊行版(梓書房)絶版(都市の大きな図書館にあり)復刻版 平凡社ライブラリー1996年3月初版(一般書店で注文販売)



## 新入会員の紹介

田中 弘子さん(足利市)  
(指導員 田中 志朗氏夫人)

NPO 尾瀬自然保護ネットワーク  
〒100-0014  
東京都千代田区永田町 2-17-5-203(株)SEC 内  
電話 03-3851-0321/FAX 03-3581-2178  
[http://www.geocities.jp/oze\\_net/](http://www.geocities.jp/oze_net/)

理事長 高橋 喬  
事務局長 椎名 宏子  
編集担当 島上 健  
HP 担当 東雲 明

